

を用いて精誦していたと考えられる。これは政府が金光明最勝王經一〇巻本の普及を奨励したが、天平期の諸国正税帳（例えば天平一年度伊豆國正税帳では「金光明經四卷」とみえる）から明らかなように、天平一五年段階でも地方では金光明經四巻本を使用していたことを裏付けている。

裏面の「：精誦奉」の記載方法については、經典名は異なるが大般若經では、一五世紀前半までは「：大般若經転読奉」という記載方式だったが、一五世紀後半～末頃に「奉転読般若經：」という形に変化すると推測されている（鷗谷和彦「中世遺跡出土の大般若經転読札」〔『網干善教先生華甲記念 考古学論集』一九八八年〕）。本木簡の記載は前者の方式に合致し、本木簡は、中世以降の大般若經転読札の先駆けとなることも指摘できる。

以上のように、律令國家が命じた金光明最勝王經の転読が諸国で実際に励行されていたことを、本木簡の発見によって、はじめて陸奥国南部の山間部において、しかも大寺院ではなく簡素な仏教施設と思われる場において立証した意義はきわめて重要である。

なお木簡の解釈には、新川登亀男氏より御教示を頂いた。

9 関係文献

福島県教育委員会・財福島県文化センター「福島空港・あぶくま
南道路遺跡発掘調査報告一二」（二〇〇一年刊行予定）

（福田秀生・平川 南〈国立歴史民俗博物館〉）

宮城・大日南遺跡

だいにちみなみ

所在地 宮城県多賀城市高橋字大日南・大日北・門間田

調査期間 一九九九年（平11）一一月～一二月

発掘担当者 石川俊英・齋藤 稔

遺跡の種類 屋敷跡

6 遺跡の年代 中世

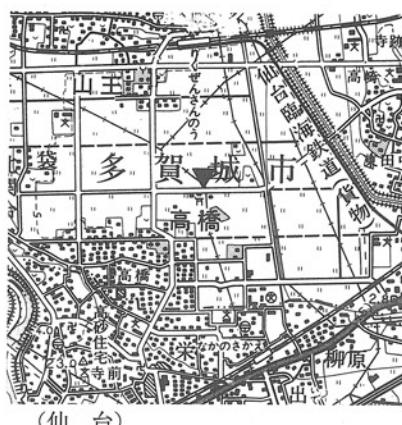
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

大日南遺跡は特別史跡多賀城跡の南西約1kmに位置し、海拔4m前後の微高地上に立地している。本遺跡の北側100m～200m

に東西に延びる七北田川の旧河道があり、中世には冠川と呼ばれている。

これまでの調査では、一三世紀～近世初頭にかけての遺構を多數発見している。

特に一五世紀～一六世紀にかけて、溝で囲まれたいくつかの屋敷跡の存在が判明



（仙台）

しており、そのうちの調査区西側にある屋敷跡は、一辺四〇mを超える規模である。

一九九九年度の調査は変電所建設に伴うものである。この場所は本遺跡の北部にあたり、南から続く微高地にある。発見された遺構は溝・井戸・土坑である。木簡は屋敷跡を区画するSD四五三から二点出土した。この溝は同位置で二時期の変遷があり、そのうちの新しい時期のものは最大で幅三m深さ五〇cmである。いずれの木簡もその新しい時期の溝から出土している。木簡以外の遺物は、古瀬戸瓶子・無釉陶器甕・曲物・自在鉤・砥石などが出土しており、古瀬戸瓶子の特徴から、年代は一二世紀末以降と考えられる。

8 木簡の釈文・内容

- | | | |
|-----|-----------------------------|----------------|
| (1) | 「 ^(火)
南無大日如來」 | 277×41×3 061 |
| (2) | 「 ^(火)
南無大日如來」 | 242×24×2 061 |
| (3) | 「 ^(火)
炎」 | (163)×27×3 059 |

(1)と(2)は、形状・内容ともに同一である。頭部は圭頭状であり、下部は尖らせている。(2)は頭部に一部欠損がある。いわゆる笠塔婆と呼ばれているものである。(3)は上半部が欠損しており、一文字のみ残存している。下部を(1)(2)と同様に尖らせている。(斎藤 稔)

